

新訓

万葉集 上卷

佐佐木信綱編



『万葉集』20巻は世界に誇るわが国最古の一大歌集であり、日本人の魂の故郷というに相応しい古典である。無名の人民から大詩人・貴族・天

皇まで前後4世紀余にわたるその収録歌はおよそ4500首を数える。上巻には巻1～10を収録。柿本人磨・山部赤人・大伴旅人・山上憶良ら代表的な万葉歌人たちの作が巻3に集中して現われる。(全2冊)



黄

5-1

岩波文庫

新訓万葉集上巻〔全2冊〕

1927年9月5日 第1刷発行
1954年9月25日 第32刷改版発行
1986年3月20日 第67刷発行

定価 600 円

編 者 さ さ き のぶ つな
佐 佐 木 信 綱

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

岩波文庫

30-005-1

新訂

新訓万葉集

上卷

佐佐木信綱編

岩波書店

新訂新訓萬葉集上卷 目次

序	五
凡例	九
萬葉集概說	
題號	一七
編者	一八
成立年時	一九
各卷一覽	二〇
部立	二五
排列	二六
歌體歌調	二九
歌數	三一
用字	三三

萬葉集

卷一	三七
卷二	六三
卷三	一〇三
卷四	一五五
卷五	二〇五
卷六	二三九
卷七	二七九
卷八	三二三
卷九	三六三
卷十	三九七

序

萬葉集は、古事記と並んで、日本の古典として世界に示すべきものである。また、源氏物語と並んで、日本の文學書として世界に誇るべきものである。しかして、われらの祖先の心の聲を知るべき書として、わが國民にあまねく讀まるべきものである。しかもその書は、全部漢字で書かれてゐるために、現代の人にとつては親しみがたい。ここに、その原文を、現在普通の書き方に従つて、假名と漢字とを交へた體に書き改めたのは、一般の人に讀み易からしめんがために外ならぬ。

序

本集を假名交りに書き改めることは、既に古人もなしたことであつて、假名萬葉集や、元文元年に東墻菴吸風の書いたものなどが傳へられてゐる。自分もはやくこれに志し、明治四十二年には、脱稿して木村博士に序を乞うたが、その後、これをかりそめにすべからざることを思ひ、歩を轉じて、橋本・武田・久松氏等と萬葉集諸本校合のことに従ひ、十有二年にして漸く校本を完成した。校本萬葉集の刊行の後、一方に定本の作成に努めつつ、また一方、この新訓萬葉集を編して、ひろく世の需に應ずることとした。それは昭和二年のことである。

當時すでに、書き下しの萬葉集は數部世に出てゐたが、それらは、おほむね萬葉集古義の訓によつたものであつて、これを、そのまま現代の鑑賞及び研究の基礎とするには、缺點なしとしない。古義の萬葉學上の價值は、もとより大なるものがあるが、みだりに文字を改め、また順序を變へてゐる。その點について、自分の新訓萬葉集は、寛永版本により、古本に證なきかぎり文字を改めず、なるべく原文の文字に即して訓むことを方針とした。これは、當時として、最も學術的な態度であり、また、校本その他の成果を利用する點について最も新たなものであつたから、新訓萬葉集の刊行の意義は、少くなかつたものと信ずる。

爾來今日まで二十五年に及ぼうとしてゐるが、その間の萬葉學の發展は、まことにめざましいものがあつて、著述に論文に幾多のすぐれた業績が發表され、本書もまた、世の萬葉集に對する關心の深まりを示すごとく、年とともに版を重ねた。かつて一たび訂正を加へたこともあるが、今年また版を新たにするにあつては、さらに改訓を試み、用字を平易にもして、面目を一新することを圖つた。

思へば、自分が亡父の考をうけて、日本歌學全書の中に萬葉集を刊行した明治二十四年から、まさに六十年を數へる。しかしてまた、梨壺の五人が萬葉集にはじめて點を附して以來あたかも一千年、かつ、萬葉代匠記の著者契沖の歿後二百五十年に當つてゐる。萬葉學史上かかる意義深

い年に、現代の萬葉學の進歩のあとを本書に録して、ひろく世にわかつ機會を得ることは、多年萬葉集に親しみ、今茲八十の齡を迎へた老學徒として、まことに喜びに堪へぬ次第である。

昭和二十六年十月

佐佐木信綱

附記 上に述べたやうに、天曆五年より一千年、萬葉學上、記念すべき年にと、銳意努力して、原稿を整理し、序文をもしたのであつたが、爾來、五校六校と校正の數を重ねるままに、月日をも重ね、ここに漸く刊行することを得たのである。

昭和二十九年六月

凡 例

例

一、本書は、萬葉集の原文を、現代普通の、漢字と假名とを交へる體に書き改めたものである。底本としては寛永版本を用ゐ、みだりに文字を改めないことを方針とした。但し、古寫本または諸家の説によつて文字を改めたものは、脚注にその旨をことわつた。

一、歌の訓は、なるべく原文の文字の意義をそのままに表はすやうに訓むことを方針とした。

一、いまだ定訓を得ざる難解の文字は、原文の漢字のままを出して、強ひて訓を下すことをしなかつた。例へば、莫囂圓隣之の歌の第一二句のごときがこれである。

凡

一、原文の漢字が幾様にも訓まれるもの、例へば「之」の「の」「が」「し」、「從」の「ゆ」「よ」「り」「よ」、「吾」及び「我」の「わ」「われ」「わが」「あ」「あれ」「あが」等のごときは、今にはかに定めがたいが、あるいは場合によつて、あるいは全卷を通じて、一訓のみを採つた。すなはち「之」「從」は場合によつて訓を定め、「吾」及び「我」は「わ」「われ」「わが」の訓を採つた。(あ、あれ、あが、とした少數の場合もある。)その他、「上」「音」「思」を「うへ」「おと」「おもふ」と訓むか、「へ」「と」「もふ」と訓むか、「爾有」「等云」を「にある」「とい

ふ」と訓むべきか、「なる」「とふ」または「ちふ」と訓むべきか等のごときも一定しがたいので、もつばら格調に従つてその一によつた。

一、原文の漢字の字形に關する異説により、あるいは、漢字の意義のとり方に關する異説によつて、兩訓の成立するものは、そのままれりと思はれるものを本文に採り、別訓を參考として脚注に示した。但し、前項に掲げたごとき、主として格調上の異同は、多くは注しなかつた。

一、歌の部分に用ゐる漢字は、なるべく平易なもののみを採つた。朝と旦、至と到と及、浦と汭、波と浪、妻と孀、飽と厭、命と壽のごとく、同じ語で原文に幾様にも書かれてゐるものは、なるべく普通の字の方を採つて、一貫するやうにした。大君、大王、大皇、天皇、皇、王は、天皇には大君、皇族には王とした。

一、原文に用ゐられてゐない漢字を用ゐたものも、時にある。例へば、雁、萩、沖のごときがこれである。

一、當用漢字表以外の漢字には、原則としてふりがなを附けた。但し、初出のもののみで他を略した場合もある。

一、假名遣は、從來の文語文における慣習、すなはち、いろは四十七字の範圍における歴史的假名遣に従つた。本集自體の用字には、さらに上代特殊假名遣の區別があるのであるが、それを

示すことをしなかつた。「野」「小竹」「樂」等は、近世以來、「ぬ」「しぬ」「たぬし」等と訓んできたが、特殊假名遣に關する知識から、むしろ現代の發音において「の」「しの」「たのし」等と訓むのを妥當と認めた。

一、題詞及び左注のよみ方については、本集當時、漢文訓讀の法式がすでに一定してゐたものは思はれないが、日本書紀や内外典の古訓點を據として、なるべく當時の訓讀の文體に近づかむことを努めた。考及び古義は、すべての語に和訓を附けてゐるが、「御製」「相聞」「挽歌」「倍俗先生」のごとき、字音のままに讀むべきものもあつたと考へられる。今は、これらに強ひて和訓を求めなかつたが、一方、字音のふりがなを附ける代りに、簡単な和訓を附けて意義をとりやすくした場合もある。

凡

一、字音語のふりがなは、字音假名遣によつたが、その上に、「檀越」に「たにをち」、「黒闇」に「こくあむ」のごとく舌内の韻尾を「に」「ち」唇内の通鼻韻尾を「む」と記したのは、古訓點の例に従つたのである。但し、かやうな假名づけを一々假名のままに讀んで當時の字音が復原できるものとも限らず、ことに漢文の部分においては、韻尾の發音はもつと漢土の原音に近かつたかも知れないと考へる。

一、假名の清濁は、出来る限り根據を求めてその一によつた。従つて、今日普通の發音と、清濁

を異にするものが間々ある。それらの著しいものは、次に示す通りである。但し、助詞の「ぞ」は、清音の場合が多かつたやうに見られるが、本書では一様に「ぞ」としておいた。

いちしるし いふかる うなはら おほつかなし おほほし かきろひ かねくには
 ら このころ さにつらふ さわく しのふ ずは すめるき そそく たまかきる な
 がつき なへに むせふ もみち もみつ (以上清音)

あきづ いざる いざり火 (以上濁音)

一、脚注には、新訓を附するに當つて、底本なる寛永版本の本文を改めた根據、訓と本文とに關する異説、及び原文の文字の特に注意すべきものを掲げた。

底本の文字を訂した時、本文のその行の下に、まづその部分の訓を掲げ、次に「」の中に訂正された字面、次に()の中に訂正の根據を示した。訂正の根據たる古寫本及び諸注釋は、左の略號を用ゐることとした。

桂 桂本 元 元曆校本

藍 藍紙本 嘉 嘉曆傳承本

金 金澤本 尼 尼崎本

天 天治本 類 類聚古集

古葉 古葉略類聚鈔

溫 溫故堂本

神 神田本（紀州本）

矢 大矢氏舊藏本

西 西本願寺舊藏本

京 京都大學本

文 金澤文庫本

無 活字無訓本

冷 傳冷泉爲頼筆本

附 活字附訓本

細 細井本

仙 萬葉集註釋（仙覺抄）

略 萬葉集略解

拾 萬葉拾穗抄

燈 萬葉集燈

代 萬葉代匠記

檜 萬葉集檜燭手

僻 萬葉僻案抄

古義 萬葉集古義

訓 萬葉集訓釋

略補 萬葉集略解補正

童 萬葉童蒙抄

宣長 本居宣長の説

考 萬葉考

久老 荒木田久老の説

玉 萬葉集玉の小琴

意改 編者の意を以て改めしもの

槻 萬葉考槻落葉

底本の誤りであることの著しいもの、例へば、四十五頁、額田王「秋の野の」の左注に、三月戊寅朔とある「戊」は、底本「戌」であつて、元暦校本以下によつて訂されるが、かやうな訂正は注しないこととした。略體その他の異體字を、今日通行の文字に改めた場合も同様である。

訓と本文とに關する異説を擧げる時、本文のその行の下に、まづ本書の訓を掲げ、「或」の字を置いて別の訓を示した。原文の文字を改めた場合には、まづ「 」の中に改めた字面を、次に（ ）の中にその異訓の根據を、更に「 」の中に底本の字面を示した。

いはゆる義訓また戲書などのごとく、原文の文字の特に注意すべきものについては、まづ本書の訓を掲げ、「原」の字をおいて、その訓にあたる原文の文字を示した。

一、寛永版本には、卷一の末に仙覺の奥書があるが、卷二十の仙覺の奥書の前にうつした。なほ、卷三の末に旅人等の官歴が掲げてあるが、それは省略した。

一、歌の頭及び目録の題詞の下にある數字は、國歌大觀の歌集部に附するところの番號である。同書には、或本歌、一書歌の中に、番號を附せるものと附せざるものがあり、また、一首の長歌を分つて二つの番號を附せるごとき失などもあるが、檢索の便を慮つて、すべて國歌大觀と等しくした。

また、右の數字に並べて、（ ）の中に記した數字があるのは、寛永版本の丁數である。

一般の讀者には不要であらうが、萬葉集總索引を利用して檢出しようとする人のために附した。但し、丁が一首の半でかはつてゐる場合、長歌では、その句の上に記し、短歌では次の歌の頭に記し、かつ一丁の表裏を示すことを略した。

一、もと本書は、上欄に寛永版本の原文を載せて、對照に便ならしめるやうに計畫したのであつたが、小形の文庫本として書き下しの部分のみを印行することになつた。その原文は、別に本文庫の中に刊行された「白文萬葉集」を見られたい。かつ、上に述べた底本の著しい誤の訂正も、同書に譲ることとした場合が多いから、詳細に知らうとする讀者は、「白文萬葉集」を参照せられたい。

一、本書の訓には、編者自身の新訓のほか、一々注してはゐないが、定本萬葉集の武田祐吉博士、新校萬葉集の澤瀉久孝博士、佐伯梅友氏、また橋本進吉博士、金田一京助博士、その他多くの現代研究者諸家の説、特に清濁に關して大野晋氏の新見によつたものがある。あはせてここに深く感謝の意を表す。

なほ、本書の改訂にあたつて林大氏の助力を得たについても、厚く謝意を表す。